

長崎県立大学

実践的な学びを追求し、自ら考え、行動できる人材を育てる③

論理的思考力と深い教養を備えた
グローバルな日本人を育成

岩重 聡美

(いわしげ・さとみ)

長崎県立大学 経営学部
国際経営学科 学科長

福岡大学大学院商学研究科博士後期課程単位取得満期退学。東亜大学東北国際専門大学院博士後期課程修了。博士(国際学)。2008年より長崎県立大学経済学部教授。16年より現職。専門は国際流通論、消費者保護論。

まずは、「英語で考え、英語で発信できる力」を身に付けさせたい

長崎県立大学経営学部国際経営学科はこの春、学科再編による誕生から3年目を迎える。海外研修の必修化やベルリッツの外部講師による英語教育など、公立大学でありながら独自性の高い取り組みが注目の的だ。3年次への進級要件として、TOEIC® スコア「600点以上」を課しているが、すでに2年生全員がクリアしているという(卒業要件は同スコア730点以上)。同学科が育成を目指す、真のグローバル人材とはどのような人材なのか。岩重聡美学科長に聞いた。

語学学習で達成感を味わってもらいたい

1年次から徹底した語学学習を行っている理由を教えてください。岩重 国際的な現場で活躍しようと思えば、当然英語は最も基本的なツール。ですから、まずは実践的な英語をシャワーのように浴びてもらい、スキルに磨きをかけます。これが、例えば「国際経営論」「国際マーケティング論」「国際金融論」「国際流通論」「コーポレート・ガバナンス」といった専門科目を学ぶ際の武器にもなる。将来の学びの軸になるわけです。加えて、語学学習に力を入れていく理由は、実はもう一つあります。それは、「努力が結果を生む」という

達成感を学生に味わってもらうためです。TOEIC® スコアはその象徴。実際、1期生の平均点はこの2年間で435・7点から728・4点に伸びました。こうした結果が自信を生み、学びの原動力となる。そして、それは社会に出てから壁を乗り越える力にもなると考えています。そのほか、学生たちのどんな能力を引き出したいと思えますか。岩重 まずは学生たちが学んだ経営の専門知識を実践の場で生かせる能力です。そして学んだ知識をもとに、論理的に考える力も身に付けてほしいとの思いから、物事の根拠や背景を重視する指導を心がけています。社会に出て多様な業務を並行して進めていくには、やはり仕事に優先順位を付け、筋道を立てて考える力が必要です。またグローバル人材ということでは、異なる価値観を持つ人たちとの連携が欠かせません。ここでも論理性や合理性が共通理解の基盤になります。自らの主張や思いを的確に表現するためにも、論理的思考力は欠かせないものなのです。

さらに、国際経営学科では教養教育も大切にしています。なぜなら幅広い教養が、自分が何者かを知り、アイデンティティを確立する助けになると思うからです。国際社会では、他者を理解し、受け入れる能力がいつそう求められます。その前提とな

るのが、アイデンティティの確立だと考えています。

海外研修の中身はすべてオーダーメイド

カリキュラム上の特徴について具体的に教えてください。

岩重 1年次にはフィリピンのセブ島で3週間の「海外語学研修」を、そして3年次には東南アジアなどの企業や団体で「海外ビジネス研修」を行います。いずれも必修で、身に付けた英語力や理論を実践の場で試す絶好の機会です。研修はすべてオーダーメイドで、現地の語学学校や受け入れ企業とは事前に何度も打ち合わせを重ねます。こちらには研修で学生に身に付けさせたい力があるので、それを達成するために教職員も努力は惜しみません。

当学科は、「卒業まで一人の脱落者も出さない」ことが基本方針。私を含め教員全員が学生一人一人と継続的に面談し、相談に乗るようになっています。カリキュラムや卒業要件は厳しいですが、最大限、良質な学びの環境を整えたいと思っています。最後にあらためて、国際経営学科からどんな人材を輩出していきたいか聞かせてください。岩重 多くのグローバル企業の方たちとお話しして感じるのは、経営の

専門知識を理論的にしっかりと修得することの重要性、また柔軟性や素直さの大切さです。これがあると、人の役に立て、自分も成長できます。一方、社会人であれば自分の意見を明確に述べることが大事。この両面を持ち合わせた人間を育成していくことが目標です。その実現のためにも、専門知識や論理的思考力、深い教養を学生たちにつかりと届けたい。それらを道具にして、固定観念に縛られることなく課題に向き合うことができれば、どんな世界でもやっていけるはずですから。3年次以降は、専門科目の比率も高まります。そこでは、自らの学びをいっそう深めて自分のものにしてもらいたい。そして将来、学生たちが「大学での時間が、今の自分の人生の土台になっている」と振り返ってくれたらうれしいですね。

取材を終えて

2年弱でTOEIC®の平均スコア約290点アップは大きな成果に違いない。ただ印象的なのは、その背景にある学生と教職員の関係性だ。定員60名という少人数体制を強みに、学生個々の性格まで踏まえた指導を行っており、そこに両者の信頼関係が見て取れた。そうした環境が、どんなグローバル人材を生み出すのか、これからが楽しみだ。

「根拠を示して自分の考えを述べること」を大切にしていきたい



中山 莉聡

(なかやま・りさ)

経営学部
国際経営学科 2年

「将来のため、英語だけでなく、専門的な知識も学びたい」との思いで、長崎県立大学の国際経営学科に。着ているアオザイは、海外研修先のベトナムで購入したもの。

3年次に実施される「海外ビジネス研修」、その試行的なプロジェクトで2年次の11月にベトナムのダナン市に行きました。インターンシップで訪れたのは市の外務局で、仕事は「APEC Vietnam 2017」の関連会議のサポートです。ダナン市長と諸外国の政府高官の会議や企業のトップ会談で記録写真の撮影などを行いました。

約2週間の研修で実感したのは、当たり前ですが日本との違い。時間の感覚一つとっても、私たちとは異なります。「多様性」という言葉は頭では理解していましたが、その一端を体感できたことは大きかったと思います。また、会談で両者の橋渡し役を務める外務局の職員の方を見て、「私も国際的な場で人と人をつなぐ仕事をしたい」と強く思える



左：ベトナムでの海外ビジネス研修には、国際経営学科の2年生3名で参加。海外の現場でしかできないことを経験する貴重な機会だ。右：APECの関連会議の記録写真を撮影する中山さん。写真は、ベトナムと中国の政府関係者による会議の一場面。

たことも収穫です。

将来のために必要なのは語学力だけではありません。インターンシップでは、社会や経済に関する知識の不足も感じたので、今後は授業で勉強したことと日々のニュースを関連付けするなどして、学びを深めたいと思っています。

加えて心がけたいのは、根拠を示して自分の考えを述べること。先生

からはよく、「なぜそう考えたのか、データを示して説明するように」と指導されます。やはりグローバルな現場でのコミュニケーションでは、事実に基づき、ロジカルにやりとりすることが大事になります。

英語を使う仕事に就くことは、高校時代からの目標。語学も教養科目も専門科目も積極的に勉強して夢を叶えたいと思います。